

中国のほんの話(69)

LIBRAIRIE AVANT-GARDE 先鋒書店

～ 中国における民営書店のさきがけ ～

蔭山達弥



「先鋒」と言えば、中国で一昔前までは日本のオーディオ専門メーカーのパイオニア（2014年にオンキョーと経営統合）のブランド名だった。1996年12月、その冬は南京で一番寒い1年だった。15cmあまりの積雪に覆われた南京太平南路の聖パウロ教会の向かいに1軒の僅か17平方メートル、書棚は僅か10の書店が開業した。その店の名は「先鋒」、店のスローガンは「大地のよそ者」（アヴァンギャルド）、店の商標や図書の分類はすべてフランス語だ。この民営の書店を開業したのは銭曉華。創業者銭曉華の言葉、彼へのインタビュー、彼を取り巻く作家、学者、メディア関係者、読者らの激励の言葉で埋め尽くされた『先鋒書店 大地上的異郷者 LIBRAIRIE AVANT-GARDE』（広西師範大学出版社 2005年10月）を読むと、1990年代半ば、改革開放で民営の書店が作られ、読者から絶大な支持を受けた当時の状況がよく分かる。

同書に収録されている汪継芳、銭曉華《访谈录·先鋒書店，她是我的一件作品》（インタビュー・先鋒書店、それは私の作品の一つだ）を読むと、一個人が民営書店を開店するまでの様々な苦難が分かり、読む者の胸を打つ。「私の郷里は茶葉を生産していて、私の家は茶畑を請け負っている。しかし茶葉の商売を最後までやっても行き詰ってしまう。その時、私は考えた。本屋を開こうか？本屋を開けば、心が安らぐ。なぜなら小さい頃から読書が好きで、ずっと本をお供にしてきた、しかも自分が学んだのは国文、これも生活の面白みの一つだと思って、こんな店を開いたのだ。」店の初期投資は、創業者銭曉華自身が茶葉の商売で得た6、7万円を運転資金にした。では店に並べる書籍はどのように仕入れたのか？「主に古い版の図書だ。1996年にこの店を開くために、私は飛行機に乗って昆明、桂林、上海に行き、古い版の図書を買付け、知らない人のところへ行ってその人と話し、当時はこの商売をどのように運営するのか知らなかった。私はその日に桂林まで飛び、当時の瀋江出版社社長羅震寧に会い、彼の特価図書を掘り起こしてきた。さらに雲南人民出版社の倉庫にある図書を皆掘り起こしてきた。それから上海に行って、上海訳文出版社の本を求めた。私は4日で3つの都市を回り、どこでも遊ばなかった。桂林に着いた時、大雨にあって、飛行機は飛べなくなり、私は辛抱して待った。上海についたとき

は午後、出版社に駆けつけ、夜家に着いたのは1時だった。私は3万円の現金を持って行って、3割引の本を買付けしてきた。瀋江出版社のノーベル文学賞受賞叢書、フランスゴンクール文学賞叢書、皆当時は非常に影響力を持っていた本だ。私は昆明でコンテナ一つを手に入れ、桂林でコンテナ3つを発送したのを覚えている。…」先鋒書店は知識層の住民が少ないところにあり、店舗の面積は小さく、既存の書店と同じような品揃えでは太刀打ちできないので、銭曉華は経営の特色を出版社の倉庫にある本に置いた。この方針は当たった。出版社が南京に送ったコンテナは9つ、書店はそれで次第に評判を呼び、周辺の書店も急いで本を買いに来た。書店も読書人の集まりの中心、人文学者が真っ先に訪れるところになった。作家の蘇童は一番よく来店した一人だ。彼はアメリカ文学を好んだ。

だが、2010年に入ると民営書店は厳しい状況に遭遇する。2010年1月に北京で民営書店の草分けとして有名な第三極書店が倒産すると、翌年には北京大学南門近くにあった風入松書店や万聖書園が倒産、市内に20数店舗あった北京最大の民営書店光合成書店までが倒産した。2011年1月20日『新京報』によると上海第二の大型書店、博庫書城が経営困難に陥り、北京の讀易洞書店貨貿店が賃貸料の高騰で店を閉じ、三聯韜奮図書中心は喫茶店に2階を貸して、収支のバランスを維持している。中国でも最近の学生は本を書店では買わず、ネットで購入する。アマゾンに代表されるオンライン書店の売り上げが伸びている一方、先鋒書店のようなリアル書店は厳しい冬に直面している。その一方で同年4月6日『新京報』では、シンガポールで大きな名声を博しているPage One書店が複合式経営ではなく、あえて書籍販売のみで北京地下鉄国貿駅近くに進駐し、盛大に開業したことも伝えている。

かげやま たつや（非常勤講師・中国文学）